

# 京都府における自然環境の認識と保全のための自然観察会運動

自然観察指導員京都連絡会

宮本 水文

西川 忠樹

## はじめに

自然の大切さ、自然保護の必要性、自然観察会のあり方などがさまざまに語られています。私たちの身のまわりに豊かな自然があった時代には考えられなかったことです。健康な身体と同じように、失って初めて人々はその大切さに気づくのでしょうか。

自然観察といっても、何か特別なことをするわけではなく、その出発点において特別な教育も技術も体力も必要としないものです。人々のごく普通の生活の中に自然観察があり、誰でもが自然観察者であり得ます。

自然界にはさまざまな生き物のくらしがあり、人間の生活と密接なつながりをもっています。それらを見るがままに見ること、何気なしに漠然と眺めるのではなく、「見ようと思っ てじっくり見ること」、そこに自然観察の第一歩が始まります。

私たちの自然観察会運動は人々の目を自然へ向けること、自然に対する共感的な態度を育てることを当面の目的としています。豊かな自然に恵まれ、千年の都として歴史と文化を誇る京都にも「再開発」の波が押しよせています。平安遷都1200年（1994年）にかけて、目白押しと伝えられる京都「再開発」計画が京の街並みや、それをとり囲む自然、ひいては市民生活の日常に何をもたらすのか、私たちは強い危惧の念を抱かざるを得ません。

自然保護にもいろいろな方法がありますが私たちは自然観察会を通じて自然保護の思想を普及し、その広範な世論形成によって京都の自然環境の保全に資することを目的としたいと考えています。

## 1. (財)日本自然保護協会と自然観察指導員の養成

昭和24年、尾瀬に水力発電所建設計画が持ち上り、それに反対する「尾瀬保存期成同盟」が結成されましたが、昭和35年、それが発展的に改組されて「(財)日本自然保護協会」となり、今日に至っています。

自然保護協会では、自然保護活動、出版活動、研究・調査活動、普及活動など多様な活動を行っていますが、普及活動の一つに自然観察指導員の養成があります。

自然保護運動の重要な一環を担うものとして自然保護教育＝自然保護思想の普及が挙げられます。自然観察会運動はこの自然保護思想の普及のための手段として位置づけられており、そのため自然観察会運動を支え、自然保護思想の普及の核となる働き手として自然観察指導員の養成が全国的に行われてきました。

指導員養成講座は1978年以来、128回に及び、6500人以上の指導員が都道府県単位で連絡会組織を作って活動しています。しかし、自然観察会運動の歴史は未だ浅く、運動の進め方が確立している訳でもなく、各地ともその進むべき方向を模索しているのが現状と思われる。

## 2. 自然観察指導員京都連絡会の性格

京都府在住の指導員は150名強ですが、京都連絡会は1983年に結成され、6年目を迎えて90名の会員が参加しています。

京都連絡会の活動は社会人の自主的な余暇活動によって支えられています。それぞれに多忙な仕事を持つ市民が貴重な余暇をさいて、無報酬で行うボランティア活動です。

従って働く市民の休日、余暇の実状からみて無理のないスケジュール、活動スタイルをとることが必要です。

また、会員一人一人の個人的事情を充分配慮し、その人の事情の許す範囲でその人に適した形で活動に参加することを認め合うことが必要です。

さらに、地味な市民運動の常として、会員一人一人が持てる物を持ちより、出せる物を出し合うというようにさまざまな形で会の活動に関与していくことも大切です。

次に「公開自然観察会」の位置づけの問題があります。「公開自然観察会」は私たちが直接、市民に自然保護思想の種をまく機会であり、会の活動の重要な柱の一つとして位置づけています。

しかし、会の活動がそればかり優先されると、講師（指導者）となる一部の会員のみに関が当たり、他の多くの会員が日陰にまわされ切捨てられる危険性があります。

京都連絡会にもかつて、「公開観察会」の実施を中心として“少数精鋭”で運営する“身軽な”連絡会を指向する一部の動きがありました。今日、「自然観察会」は社会的な

ブームになりつつあり、さまざまな形で“観光化”され、営利事業として成り立つ素地が生れています。要領よく、このブームに乗るため“有能な”指導員だけを結集して“身軽な”会を作れば、容易に道は開けていたと思われれます。

しかし、私たちはこのような方向を取らないことにしました。自然観察会はあくまで手段であり、その原点は自然保護思想の普及を目的とする啓蒙運動です。自然観察会が自己目的化して、原点が忘れられてはならないと思います。

京の街でさまざまな職業、思想を持った社会人がコツコツと息長く、自然保護の市民運動を続けていくために大切なことは、会の“身軽さ”ではなく、年齢、性、職業、趣味、思想などがさまざまな人々からなる会員層の“厚み”ではないかと考えます。いろいろな個性の魅力、そのハーモニーで周囲の人々に自然の美しさや尊さを知らせるきっかけとなる仕事をしていきたいと考えています。

以上、述べてきたような京都連絡会の性格づけは何年かの活動の中で試行錯誤をくり返しながら次第に定着させてきたものですが、こうした前提の上に以下の活動方針を編み出して活動しています。

### 3. 京都連絡会の活動方針、活動内容

1988年の活動方針は次のとおりです。

- (1) 会員のための活動（自己研修、親睦）
  - ① 定例観察会（毎月第2日曜日）
  - ② 臨時観察会（年に数回）
  - ③ 室内例会、講演会
  - ④ 研修会（日本自然保護協会と共催）
  - ⑤ 総会
  - ⑥ 機関紙「森の新聞」「伝言板」の発行
- (2) 対外活動（自然保護思想の普及）
  - ① 公開自然観察会
    - イ．連絡会の企画
    - ロ．京都府の委託事業（京都府歴史的な自然環境保全地域6カ所）
  - ② 他団体への講師派遣

### ③ 「自然観察地ガイドブック」(京都市域及びその周辺)のための調査活動

会の活動として先ず、会員の研修と親睦のための活動があり、次のその成果をふまえて一般府民を対象とした公開観察会を行います。これを会の基本的活動と規定し、両者に同じウエイトを置いています。

会員のための活動は指導員としての会員が身近な自然を知る研修と親睦のためのもので、毎月の定例観察会と、ややテーマを絞った臨時観察会が中心になっています。

対外活動は会の仕事として一般府民を対象に公開観察会などを企画、実施するもので、会独自に行うもの、行政の委託を受けて行うもの、日本自然保護協会との共同で行うもの、他団体への講師派遣などがあります。

機関紙「森の新聞」は奇数月に発行しています。

昨年6月、京都府の委託事業で自然観察路ガイドブック「ふるさとの自然」を発刊しました。その経験をふまえて、これから連絡会独自の企画で自然観察地ガイドブックづくりにとりくみます。

なお、連絡会の運営は世話役としての幹事会(20名)で話し合っています。

## 4. 京都連絡会活動史

- 1983年6月 結成《9名》
- 1984年6月 府下に於る第1回自然観察指導員講習会《会員30名強になる》
- 7月 機関紙「森の新聞」創刊
- 8月 京都府歴史的な環境保全地域(男山、岩戸山)での自然観察会(府委託事業)
- 11月 研修会、講師に京都府立大学学長、四手井綱英氏「京都・人と自然」
- 12月 緑の国勢調査に協力、市周辺の87メッシュの報告書を提出
- 1985年 公開の自然観察会(府委託事業)  
(大悲山が加わり3カ所となる)  
公開ブナ林観察会(八丁平)  
講師派遣(男山地区ガールスカウト)  
自然観察路ガイドブックのための調査活動(府委託事業)始まる  
第2回自然観察指導員講習会《会員50名強となる》

- 1986年
- 定例観察会（毎月第2日曜日実施を決める）  
自然観察指導員全国大会（於滋賀）に参加  
公開自然観察会（府委託事業）（当尾が加わり4カ所）  
《会員70名強となる》  
公開ブナ林観察会（八丁平、比叡山）  
自然観察路ガイドブック調査、執筆活動続く  
定例観察会（年12回）講師に堀田満氏、四手井淑子氏、村田源氏を招く
- 1987年
- ① 会員のための活動
- 定例観察会 11回
  - 臨時観察会 4回（テーマに芦生の植物、タマシギ、ツバメのねぐら、シダの前葉体など）
  - 講演会（府立植物園園長木幡欣一氏「植物園の果たす社会的役割」）  
森の新聞（奇数月発行）21号を数える。
- ② 対外活動
- 公開自然観察会（府委託事業）（小塩山が加わり5カ所となる）  
公開ブナ林観察会（八丁平、芦生）  
講師派遣（ボーイスカウト他4回）  
第3回自然観察指導員講習会  
《会員87名となる》  
自然観察路ガイドブック「ふるさとの自然」と題して発刊（6月）

## むすび

私たちは今、京の街や自然が大好きな仲間が集って自然観察会運動をすすめています。

そして観察会のあり方を野外における理科教育の延長としてではなく、自然科学は勿論、人文科学をも含めた総合的な文化活動としてとらえています。その意味でも、さまざまな個性をもった会員層の“厚み”を大切にしていきたいと考えます。

千年の都、京都では、自然も永年にわたって人間の働きかけを受けてきており、原始の姿とは全く異なったものとなっています。たとえば、北山の峠路のたたずまいの中に、洗練されたものがそこはかたなく漂うのも、永年の文化の洗礼を受けた京の自然の特色のよ

うに思えます。自然にとけこんだ人間の足跡、自然と人間とのみごとな合作と呼んでいいかもしれません。そして歴史はその全能の演出家だったのでしょうか。

このように自然に働きかけてきた先人たちの仕事に目を向けることで、自然と人間とのかかわり方を学び、今後の街づくりのあり方をさぐる上で有効に生かしていければ、自然保護思想の普及という、私たちの会の目的にそうことができると考えています。

京都では中世以来、町衆の力が強く、或る時はそれが大きく歴史を動かし、独自の町衆文化を創り出してきました。こうした伝統の息づく街で私たちは、ささやかな自負をもってこの運動を続けています。

小さいながら何より自主性を重んじ、生じた問題についてはいつも、自分たちで話あって解決してきました。

私たちは平常、勤労市民としてそれぞれ仕事をもっています。(会社員や公務員、教師、自営業、自由業、学生、主婦、ゆうゆう自適の退職者を含めて)

その上でなお、自分たちの生れ育ったこの国、この街のために、そして何より子供たちの未来のために役立つことをしたい——そんな願いをもちより、自らも楽しみながらこの種まく運動を続けています。

まかれた種は成長し、仲間は仲間を呼び、いつの日か、自然を尊び愛する思いが人々の共通の認識となることを信じて。



— 自然観察路ガイドブック —

## ふるさとの自然



京都府